

おわりに

本報告書にあるとおり、南海トラフ沿いで発生してきた歴史地震は、そのメカニズムも災害の様相も多様で、今後発生が予想される南海トラフ沿いの大規模地震についても、あらゆる可能性を視野に入れた対策の検討が必要である。その意味でも、今回特に規模の大きかった宝永地震について検証した意義は大きい。

もちろん、都市化の進展や埋め立て開発などによる都市環境の変化、情報伝達手段の高度化など、国民の生活様式が著しく変化した現代と宝永地震当時とは、条件が大きく異なることから、宝永地震と同じ規模の地震が起きたとしても、被害の及ぶ範囲や社会的な影響は同じとはならない。

しかし、歴史地震による災害から学ぶべき点は多々ある。地震の揺れによる被害が各地域でどの程度だったのか、特に大谷崩れに見られたような土砂災害の実態を検証することは、津波による災害に注意が集中しやすい現在の防災対策に対して、重要な示唆を与えてくれるものと考えられる。

津波に関しても、たとえば大阪市内の複数の川を津波が遡上してもたらされた

被害の状況と、その時の避難者の行動や心理の検証、各地に点在する津波供養碑などから推測される津波高などの情報も、今後沿岸各地での津波防災対策を整備する上での参考になるであろう。

今回の調査では、宝永地震そのものの地震像とともに、広範囲に及んだ災害の状況について、調査検証を行った。宝永地震後に作られた石碑や文書の記録は数多く残されているが、その後150年近くを経て発生した安政東海・南海地震の際に、その教訓が活かされた例も少なくなかった一方で、却ってあだになった事例も見られた。

巨大地震の発生をただ悲観するだけでなく、地震を正しく恐れ、侮らず、将来に備えることによって災害を軽減することができる。先人は史料や史跡、石碑など多くの災害教訓を残してくれた。災害発生当時を想像し、それを現代に当てはめることによって、いつか体験するにちがいない地震災害への対応に活かすことが可能になる。そのことはまた、伝承を後世に残してくれた先人たちの思いを、未来に活かしていくことになるのではないだろうか。

(全委員・事務局)